

# 天皇の巡幸記録からわかる明治初期の天然雪氷利用について(1)

## － 明治11年の新潟県内における天然雪氷利用状況－

和泉 薫 (NPO 法人 なだれ防災技術フォーラム)

1. はじめに： 明治天皇は明治初期(1872～1885)に、期間が1ヶ月ないし2ヶ月以上にも及ぶ地方大巡幸を六度も行った。地方の旧藩主は御巡幸を平伏して迎え、それを見た民衆に江戸幕府にかわる天皇は、歴史的・民族的に支配の正当性を持ち、仁恵深い君徳を備えた至高の存在であることをアピールしたと言われていた(田中彰, 2015)。この六大巡幸は、多くが6～9月の暑い時期に馬車や板輿によって行われたため、所々の御在所や小休所では馬口洗水飲水等の設けはもちろん、可能な所では天然雪氷を調達して天皇を接待したことが巡幸誌等に記録されている。本稿ではこうした記録から垣間見えた、明治初期の日本各地で行われていた天然雪氷利用のうち、1878(明治11)年の北陸・東海道巡幸時の新潟県内における実蹟を報告する。

2. 関山、高田行在所における雪の献上： 9月10日に長野県から新潟県入りし、関山(現妙高市)の行在所に宿泊した天皇は、妙高山の谷間の残雪を採取し販売していた松山善作から氷雪の献上を受けた。翌11日には高田(現上越市)の行在所で金谷山麓の雪室(雪穴)に囲い置いた雪の献上を受けた(明治11年北陸御巡幸史, 1912-3)。上越地域では明治初期に既に雪室で貯蔵した雪を商売にしていたことがわかる。

3. 新潟行在所での雪氷の献上と付近にあった「氷室町」： 9月16日に新潟町(現新潟市)礎町の行在所―白勢邸に到着した天皇はここに3泊し二王子岳の氷雪を献上された(明治11年北陸御巡幸史, 1912-3)。またこの氷雪は五頭山(出湯山)から取り寄せた雪とも言われているが、どちらにしても9月に新潟まで融けずに運び込める量の雪が残る山ではない。後年の聞き語り(新潟古老雑話, 1933)によれば、白勢邸では函館氷を前もって(日本海ルートで)取り寄せていたという。そこまでして天然雪氷を調達したのは、事前に新潟県庁から“氷(雪)は御休泊所毎に可成丈け澤山に用意のこと”という布達があったためと考える。

16日に行在所に到着するまでの新潟町内における天皇一行の通過経路(斎藤秀平/編, 1937)によれば、信濃川河畔にあった「氷室町」を通過したことが記載されている。この頃の夏場には、信濃川上流の三条、与板、長岡などから新潟へ川船によって雪が運び込まれており、その雪を一時貯蔵していた倉庫(氷室)があったことから付けられた町名に違いない。ただこの年の9月には氷室の雪も底をついていたと推察した。

4. 荒川小休所における雪氷冷熱の献上： 9月20日に新発田での御在所白勢本邸を出発し新津へ向かった天皇一行は、道中、荒川(現新発田市)の小休所(武藤邸)で15分ほど休憩した。武藤邸では飯豊山(加治川上流か)の雪を、前日から山入りし中継所を通して走って運び一行が到着する前に運び込み、小盥(たらい)に入れて玉座に置いていた。つかの間だけ玉座付近を涼しくするために掛けた労力は大変なものだったと推察されるが、これも新潟県庁からの事前の通達で各地の旧家が最大限天皇の接待に努力した結果と言える。

5. 長岡行在所の庭園に造られた雪山： 9月22日、天皇一行は、三条の行在所を出発し長岡の表町小学校内に新築された行在所に到着された。長岡行在所の周囲には庭園も造られ、その一部には天然の雪を積んで富士山形の雪山が築いてあったという。しかし、前夜から徹夜で多数の人夫を使って築いたこの雪山は、非常な暑気のため夕方到着時には見る影もなかったという(北越新報社/編, 1927)。この明治11年は殊の外暑気甚だしかったということである。当時雪室が沢山あった長岡でも9月になって集めた貯蔵雪はそれ程多くなかったと推察される。その上に暑気がたたって雪氷冷熱を献上し損ねたのであろう。

6. 宮本、外波での雪氷献上と本稿のまとめ： 上記のほか、9月15日には宮本(現長岡市)で、9月28日には外波(現糸魚川市)での昼食時に、氷或いは雪を15斤用意したことが明治天皇北陸御巡幸記(西頸城郡郷土研究会, 1919)に記載されている(詳細不明)。以上のように、明治天皇が北陸・東海道巡幸中、新潟県内の7箇所天然雪氷の献上を受けた事蹟から、明治初期の新潟県内において、雪室が各地に造られ貯蔵雪を販売する商売が成立していたこと、新潟など消費地には川船を使って雪を運搬していたこと、新潟の信濃川河畔には「氷室町」という雪の一時貯蔵のための倉庫(氷室)街があったことなどが明らかにされた。